

私の出会った人々 (1)

安島 智子

◇ はじめに ◇

「臨床の現場から」ということで、今月から隔月に登場させていただくことになった。最初の回でもあることなので、余談かもしれないが私が臨床を始めるきっかけとなった、児童学科との出会いをふりかえることから、書きすすめていきたいと思う。

それまで勤務していた高等学校を退職してお茶の水女子大学の児童学科の扉を叩いたのは、もう十六年も前のことになる。「なんとすばらしい所だろう。」当時の感動は、十六年たった今も記憶に鮮明である。講義が魅力的だったのは無論のこと、何よりもかによりも私を感動させ、驚かせたのは、教官を始めとする児童学科の人々が生き生きしていることだった。私には、それぞれの人が自らの子ども性をのびやかに、恥じることなく、生きて

いるように感じられたのだ。

みずみずしい感性と、旺盛な知識欲と、ダイナミックな連帯と、そこでおきている動きは、児童学の創造に向けて止まない情熱のうねりであったように思い出される。そんなうねりの中で、私は当時松村康平教授が指導教官であった児童臨床研究室で学び、臨床の仕事が続けることとなった。

あれから長い年月がたち、多くの人達と出会い、私の心の内にも自らの子ども性を育むことができたように思われ、この仕事を続けてきたことを幸せに思う。何故なら、心理療法の仕事というのは、生きて来られなかった内なる人々を生きさせることもあるし、とりわけ、生きられなかった内なる子どもを生かしてゆくことだからである。近年、「大人になれない大人たち」のことが話題になり、同名の本まで出されているが、私はむしろ、「子どもになれなかった大人たち」と言いたい気がする。充分に子どもを生きることができてこそ、生き生きとした大人になれるように思う。生きにくさを訴える大

人が、充分に子どもを生きることができた時、生きにくさがいつしか解決していることは多い。そうしてみると人間ってどんな時にも可能性を背中合わせに持ち合わせた存在で、捨てたものじゃないなあと思われるのだ。

これから六回、私が出会ったすてきな人達のことを語ってみたいと思う。

◇普通の子になりたかった少女◇

へいともズボンをはいた、言葉使いの乱暴さは男の子のような 十一歳の少女、明子（仮名）のこと

——拒否・くり返されたキャッチボール・一体感——

最初に彼女に会ったのは教育相談室のロビーであった。しまのシャツに赤いつりズボンをはいたおっぱ頭の女の子が、肩を怒らせ、体を斜めにして足を広げ、両手を腰にあててふんばっていた。「ふん、あんたに会いたくて来たんじゃないよ。」とでも言っているかのようなふてくされた態度だった。多分来たくて来たわけでは

なかったであろう。

プレイルームでは、部屋のおもちゃを次々と手にしては、「おもしろくない」、「おもしろくないね」を連発し続ける。何があっても、何をしてもおもしろくない。この時、この「おもしろくない」と言うことに対し、私は簡単に関わってはならないこの子の持つある種厳肅な尊敬さを感じ、そっと黙った。しばらくして彼女は歌手の話が好きだと言った。歌手の話は次の回にもなされ、やっと彼女が何をしようとしているかを汲みとることができたのだが、この時は彼女の話をただ聞かせてもらっているだけだった。その後、私が天井からつるした風船のところに移動したところ、明子も追ってきて、「これなあに？」とそおっと風船を私にむけて打ってきた。私はその風船を受けて投げ返すと、明子も受けて投げ返してくる。二人の風船のキャッチボールが、受けとっては投げ、受け取っては投げ、沈黙の中でくりかえし、くりかえし続いた。距離がだんだん近づき、ボールの動きも徐々に静かになる。二人の間にピタッと呼吸の合う一体感

が生じた。タイムアップ。部屋を出た彼女の顔は満足げで、来た時とはうって変わった笑顔だった。

へここで、明子が来談することになったいきさつを述べると、彼女は周りの人達をほとほと困らせていたらしい。暴れ出すと包丁を持ってマンションの七階から飛び降りようとしたり、学校では授業中に立って歩いたり、大声を出したり、歌を歌ったりして授業妨害をし、休み時間にかさで友だちをたたき歩いたりするということだった。一人の担任では持ちこたえられず、教室を定期的に変わっていたという。またこんな話もある。クラス写真を写す時、足をガニ股に広げ、両手で目と鼻をつりあげ、舌を長くのばして写ろうとするので何度も注意したが、とうとうその姿のまま写ってしまったそうだ。ある時は三歳くらいの子どものようになつたり、ある時は全く大人びたことを言ったりするのでどう理解していいのか、手のつけようがないということが大方の大人の一致するところであった。▽

明子はこうまでして、何を求めていたのであるうか。

——私が求めている私を探す——

二回目のセッションでは、私を見るなり大変嬉しそうな笑顔をした。プレイルームに入るとすぐに歌手の話を始める。

「河合奈穂子のぶりっこぶりは何故あんなにわざとらしいのだろう。ワンパターンだ。こうやってあごをしゃくりあげるだけだ。」

周りの人がうるさいのだろうか。

性格が悪そうだ。

堀ちえみ、早見優、中森明菜は表情が自然だ。あんなにしていられたらいいな。

自然にできるのはどうしてなのだろう。

周りのスタッフがいいのじゃないだろうか

この日気がついた。歌手について思いめぐらしたり、歌手の話をする事によって、明子は自分自身のありよ

うを求めていると。自分のありようを形成していく上でのモデルとして歌手を見、確かめていこうとしていたものと思われた。初日に、「歌手の話をするのが好き」と言ったことは同時に、「私が求めている私を捜す話をしてい」という意味でもあったのであるう。この日はもう風船の打ち合いをすることもなかった。好きな男の子には、嫌われることがかりしてしまし、「ゴミの腐ったみたいな顔をしている」と語った自己イメージの否定が「歌手になりたい」ということだったのかもしれない。私が「明子ちゃんも歌手になったら、明子ちゃんはかわいいよ」と言うと、嬉しそうにして鏡の前いき、かわいらしく見えるであろう表情や仕草をつくってその姿を写していた。

明子は思春期の始まりにいる女の子だ。身体の成長・変化にともなう内からのつきあげに揺り動かされ、生育過程における発達課題のテーマがくりかえされる時でもある。また内的な自己確立と共に、自分の姿や顔だちや髪型を気にしだし、おしゃれに気を配る年頃でもあつ

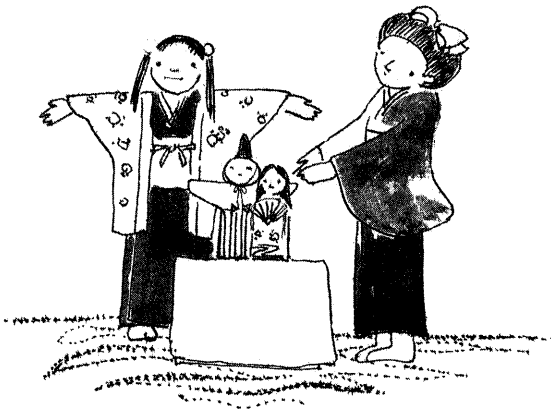
た。良きにつけ悪しきにつけ家の中にモデルとする人を持っていて他の子どもとは異なり、明子は自分自身がどんな女性になっていきたいのかを描くことは困難だったであろう。だからこそ、いっそう自分を求め、探そうとしたのかも知れない。「歌手になる」というのは自己完成像への挑戦とも捉えられる。

このあたりで明子がどんな状況で生きてきたのかをすこし説明したいと思う。

へ明子が三歳の時に、父親は家族を離れなければならない事情がおきた。残された母子は一時母子療養でも生活したが、その後兄（一歳上）は父方の祖母に引きとられ、本人と弟（二歳下）は施設に預けられた。来談した年に父親が再婚し、子ども達三人は共に引きとられ、継母との新しい生活が始まった。継母は父の仕事を手伝うかたわら、夜はスナックで働き、家の中はかなり騒然としていたようである。

——ままごと遊び・普通の人——

四日目のセッションの時、ままごとセットを用意して



おいた。すこし嬉しそうにしたがままごと道具に触れようとせず、「普通の人はおままごとをして遊んでいるでしょ。私はないの」と躊躇する。「お料理のお鍋まぜたりするの楽しそう」と言ったとたん、「でもはずかしいな」と言う。本当に恥ずかしそうな表情だ。誰もが経験しているようなことを経験していなく、誰も恥ずかしいなどと想像さえつかないようなことに、これ程恥ずかしいと感ずる明子にとって普通の子ども達と過ごす毎日がどんなに大変なことかと思つた。母親役の私に、「お手伝い何する?」と言つてはみたものの、「どうしていいかわからないから、やつて」と、私が料理をつくるのを見ていることから遊びは始まつたのだ。その中で明子はいろいろなことを提案した。

「電話きたことにしようよ」「お母さんに学校に靴をとりに行くつて嘘を言つて、友達と遊んでいることにしようよ。たまには嘘もないとつまらないでしょう。」「きょうはお父さん。赤ちゃんはじゃまだね。寝てることにしよう。やつぱりお父さんはむずかしい。」普通の家で

きていることを試みようとしたのであろう。

——やさしさの現われ・鈴木君との別れ——

私が他の子どものことで心を痛めている日のことだった。「今日お姉さんどうしたの?」とっても悲しい顔してるよ。悲しいのに遊ぼうたつて無理だよ。お話しよう。」「どうしたかは言わなくていいんだよ。悲しいってことだけ言えいいんだよ。」「こう言つて私をいたわろうとする明子のやさしさが、とっても暖かく感じられた。この日、明子はよく話した。そして話をしてるうちに、「悲しい時はどうするの?」と尋ねたので、私は、「神様とお話をするよ」と応えた。すると彼女は機を得たように話し出したのだ。「私も神様にお祈りするよ。私はキリスト教……。悪いことをしたら神様にご免なさいつて謝るの。悲しい時は神様に言っていると、だんだん悲しさが煙みたいにぬけていくよ。お姉さんどうお?」確かにこの時、私は体の中から悲しさが抜け、浄化されたような感じがした。二人の間に何かが動いたよ

うなそんな感じだった。「今わかった。やっぱり神様はいつでも助けに来てくれるんだよ。今私が話をしていられるけれど、神様が私を通してお姉さんに話しているような気がするよ。お姉さんと話をしていると勉強になるよ。」最後のひとことがおかしくて笑ってしまったが、明子は真面目に続けた。「私は赤ちゃんの心も、小さい子の心も、小学生の心も、大人の心もあるよ。」こう言いながら、どの心も自分の心にまとめていけたのだろうと思う。そして又「私は辛いことや悲しいこと、いっぱい我慢してきたから、人の気持ちよくわかるよ。お姉さんもずいぶん悲しいことがあったんでしょ？」と私の顔を見る。私が「わかるの？」と尋ね返すと、「人のことと本当に思うとよく通じるね。私はお姉さんのこと思っちゃべっているから通じるんだね」と語った。最初の回の風船のキャッチボールを思い出した。二人の関係はあの時よりずっと豊かになっている。

次の日のセッションでは、他の女の子を好きになっちゃった鈴木（仮名）君のことが話された。「鈴木君の

ことは明子が一番思っていることは確かなの。鈴木君とは、後樂園でいっしょにお揃いのブローチを買った程仲良かったのに。」「ブローチ海に捨てようかな。私ってロマンチックね。」この日はズボンしかはかない女の子の心の中にしっかりとしまわれていた鈴木君とのお別れの日であった。新しい明子が生まれようとしているものと思われる。

——再びお母さんごっこ・普通の人へ——

ある日、プレイルームに入るなり、「お母さんごっこしたい」と言う。この日は、友達から電話がかかる、電話がかかっても断わる、断わらずに遊びに行く、電話がかかっても出ると切れる、といった明子の外界への試みが表現された。遊びの中の友人達に名前をつけ、各々ぶりっ子、いやみな子、自然にできる子を、演じてみたい、私らしさを求めることが続く。そして友達と遊ぶ、おしゃべりをする、友達との悪口を言い合う、友達とけんかをするなど、日常ありそうな場面を様々想定して試

みる。新人歌手のオーディションを受けに行った日もあった。遠足のお弁当やおやつを用意してもらったり、遠足の日は特別に嬉しそだった。そして毎回のお母さんごっこで、私のつくったごはんを一口食べるごとに、「おいしい、お母さん。」「あったかい」と嬉しそうに言うことが続いた。

こうして、ままごと遊びはこの子にとっては普通の生活の体験をさせてくれる遊びであったし。十分に体験しなかつたと思われるお母さんと明子の二人だけの世界体験でもあったものと思う。お母さんがいたので、三人の友人を演じ分け、自分を捜すこともできたし、歌手のオーディションを受けることもできたのである。そして普通の家の普通の子ども体験をすることができた。後に明子の家にお手伝いさんが来ることになるが、彼女が求めている普通の人だった。「あのおばさん、普通の人なんだよ」と私の耳もとでささやいた程、彼女には嬉しいことだった。私とのままごと遊びは、後にこのおばさんとの現実生活に引きつがれることになっていく。も

ちろん、ままごとごっこ本来の持つ魅力をも堪能したにちがいない。

明子は周りの人を困らせない子になっていた。継母も、「とってもいい子になったんですよ。本当にいい子になってねー。もう行かなくていいんじゃないかな」とのこと。最終回には、私に似ているというタレントの写真をくれた。それはテレビ番組に出てくる良いOL、普通のOL、悪いOLの普通のOLをやっているタレントの写真だった。

明子の病理を診断すれば、マスターソンの言う「見捨てられ」体験を持つ子どもであろう。このことを知って付き会うことも必要であるが、それはしてはならないことを知っている必要があるというだけで、何をすることが必要かは本人が教えてくれるのである。先人が積み重ねてきた精神医学を知っていることと、生きる力を回復するかかわりができることとは別なことであって、同時に要求されるものと思う。

(このはな児童学研究所)